

[8]

氏 名	おう ぎょう う 王 暁 雨
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	東アジア文化博第7号
学位授与の日付	平成26年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	近代日中における「鍵」概念の変容と知識人
論文審査委員	主査教授 内田 慶市 副査教授 松浦 章 副査教授 奥村 佳代子

論文内容の要旨

本論文は近代日中両国における西洋との文化交渉によってもたらされた新しい概念とその訳語について、思想変遷、概念史という観点から考察したものである。

本論文は大きく二部に分けられる。第一部では「世界」「自由」「国民」という3つの概念の翻訳活動に基づく変容ルートを探求しながら、日中における概念変容と文化交渉の実像に迫ろうとしたものである。第二部は知識人における翻訳の葛藤を中心に、翻訳と文化受容の関係について考察している。

先ず、第一部第一章では、近代世界観のキーワードである「世界」の日中両国における成立過程を取り上げ、新たな世界観を構築する中でそれを如何に受容したかについて、西洋・日本・中国の間の相互作用を解明している。具体的には、「世界」とその同義語である「万国」や「天下」とのせめぎ合いと定着が如何に日中で行われ、それがいかなる世界観、思想変遷によるものかを明らかにしている。

第二章は日中における「自由」という訳語の成立を中心にし、知識人が如何に「自由」を「LIBERTY」や「FREEDOM」の訳語として選択したのかについて述べ、更に「自由」概念をめぐる日中での解説を分析して両国の近代における文化価値の方向付けを探求している。

第三章では近代日中における「国民」概念の構築を取り上げて、国家構成員の呼称としての「人民」「国民」「臣民」に対する知識人の見解を分析し、両国の近代国家思想変容と社会価値観の方向づけを解明している。

第二部は、知識人と翻訳の葛藤を中心に、翻訳と文化受容の関係を考察している。

ここでは「翻訳」という営みを真正面から取り上げて論じており、特に、日本では福沢諭吉と中村正直、中国では梁啓超と嚴復を取り上げている。

その中で、福沢については、西洋文明に対する理解が福沢の目的であり、従って翻訳と

は啓蒙のためのものであったと指摘し、漢文体に対する抵抗、伝統的学問への批判、実学偏重などがその現れであるとする。それに対して中村は東西調和の理念で、西洋文化を受容したとしている。

梁啓超と嚴復の比較においては、特に「新名詞」をめぐる論争に着目し、中国知識人の翻訳観と啓蒙思想を論じている。

論文審査結果の要旨

先ず本論文で特筆すべきは、「翻訳」は文字変換の狭義的な翻訳だけではなく、意味の伝達と受容における変換・解読のプロセスも指すという王暁雨氏の「翻訳観」である。

これまで西学東漸とそれに伴う新しい概念の受容の研究においては、現象として最も表に出てくる「翻訳」ということに関して、彼の国の語彙を如何にして此の国の語彙に置き換えるかという点に重きが置かれ、それがいつ、誰によって、どのように作られたかという語彙史の面からの研究が主流であったが、王暁雨氏の視点はこれを大きく踏み出したものと言えよう。

近代における日本・中国・西洋という三者における文化交渉は翻訳活動を中心に展開したと言えるが、そのことから、近代日中の翻訳史を考察することで、両国の思想史を見直すこともできる。本論文の第一部は「世界」「自由」「国民」という3つのキーワードを中心に、その三つの概念を近代日中両国翻訳史の視線から見直し、知識人の翻訳活動を通じて西洋からの概念を日中両国がどのように受容していったかを明らかにしている。第二部では、そうした翻訳を担った知識人を研究対象として、外来文化に対する受容態度と翻訳理念との葛藤を明らかにし、近代日中における翻訳活動の文化的要素を探求しようとしている。また、翻訳という営みは、言語の間の転換のみならず、実は、価値体系、思考様式、文明観念への選択とも大きく関わっていることも明らかにしている。

このように、総じて言えば、本論文は、単なる語彙史研究にとどまらず、概念史、思想史、翻訳観といった他領域との関わりの中で近代日中における鍵となる訳語＝概念の形成と受容について明らかにしようとした極めて意欲的な論考と言えるのである。よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。